

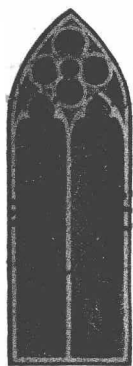
王妃の離婚

佐藤賢一



王妃の離婚

佐藤賢一



王^{おうひ}妃^{りこん}の離婚

一九九九年二月二十八日第一刷発行
一九九九年一〇月一七日第八刷発行

著者 佐藤賢一^{さとうけんいち}

発行者 小島民雄

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二丁目五番一〇

郵便番号 一〇一・八〇五〇

電話(編集部) 〇三・二三三・六二〇〇

(販売部) 〇三・二三三・六三九三

(制作部) 〇三・二三三・六〇八〇



印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

(定価はカバーに表示してあります)

©1999 Kenichi Sato, Printed in Japan

ISBN4-08-775248-8 C0093

乱丁・落丁の本がございましたら小社制作部宛てにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合をのぞき著作権の侵害となります。

王妃の離婚☆目次

プロローグ

7

第一章 フランソワは離婚裁判を傍聴する

23

田舎弁護士／被告／旧友／

クエスチオ／証人喚問／仇

敵／求め／新弁護士

第二章 フランソワは離婚裁判を戦う

129

宣戦布告／作戦会議／再喚

問／冒険／旅路／パリ／界

隈／賭け／朝の光／決定打

第三章 フランソワは離婚裁判を終わらせる

275

展開／優男／引き抜き／大
雨／狼狽／再生

エピソード

365

装丁 ☆白石良一＋生島もと子

装画 ☆八木美穂子

王妃の離婚

プロローグ

結婚しよう、とフランソワはいった。

嬉しいような、誇らしいような、同時に諦めるような、情けないような、それは混沌とした感情が渦巻いて、いつてしまったという感じだった。心の揺らぎを見透かす笑みを浮かべながら、このままで私は満足しているのだと、女は小さく答えを返した。

ひしめく都会の界限かいげんに響いて、背伸びしたラテン語まじりの会話が外から聞こえていた。ブルゴーニュ公領の併合は「イン・ユール」さ。国王陛下はフランドルまで征服すべきだったんだ。なんだって。おまえ、まさか、暴君の肩を持つ気じゃないだろうな。フランス王ルイ十一世は敵国だからと、ブルゴーニュ出身の「クレリクス」をパリから追放したんだぞ。サン・ジュヌヴィエーヴ通りを抜けながら、二人の若者は当世の政局を云々しているらしかった。

セーヌ河の左岸に広がるパリの学生街は、世に「カルチェ・ラタン（ラテン語の街）」と呼ばれていた。フランソワ・ベトゥーラスもパリ大学の学生だった。物置を改装した間借りの部屋にも、

気難しい文字が詰まった紙片の束が積み上げられ、いくら気をつけても微かな黴かびの臭いが抜けない。微かというのは、製本された書物となると高価なので、まだ六冊しか持っていないという意味だった。逆に教授先生の部屋に満ちる、むせるほどの黴臭かびくさきに憧れる嫌いだ。ではない。

それは学生の同棲だった。夕方は野菜が安いから、買物に行ってくるわ。冬になると高くて、なかなか手が出ないのよ。いうと、女は逃げるように立ち上がった。はぐらかすのは、怒りたくないからだということを、フランソワは知っていた。一緒に暮らして、もう二年になる。最近喧嘩ばかりだ。そろそろ、なんとかしなければならぬ。

「待てよ、ベリンダ」

フランソワは細い手首を捕らえて止めた。それが女の名前だった。柳の小枝で編んだ買物籠が、床に転がり弾んでいた。こんなものが本棚の横に置かれるようになったのは、いつ頃からのことだろうか。書机には花瓶が置かれ、インク壺いんくには覆いの布が被せられ、書見台の足許には、いつも毛叩けうきが用意されている。石鹼せっけんもなかった水場みづばなどは、今では小さな瓶が細々と行列して、とても自分の下宿とは思えないほどになっていた。

男所帯の殺風景を女の生活感がぐすぐすつたのは、それでも、ほんの半くらいにすぎなかったと、こちらは克明に思い出すことができる。かいがいしく家事にいそむ女の様子も、見慣れてしまえば気詰まりだった。まな板を跳ねる包丁の音がうるさい。忙せわしく掃除されると気が散って仕方がない。なканずく、学生が苛々して仕方がないのは、花を思わせた女の笑顔が、みるみる疲れて、下らない日常に流されてゆくことだった。

やはり、このままではいけない。なんとかしなければならない。

「俺は本気でいってるんだぜ」

畳みかけると、女は今度は冗談でかわそうと、からかうようにフランソワの頭頂を、ぼんぼんと叩いてみせた。いっぱしのことは、髪が生えてからいいなさい。

それは綺麗な剃髪頭^{ていはち}だった。輪のような形で髪を残すことから、「コロナ」と呼ばれた剃髪は、キリスト教の聖職者のものである。裾の長い黒の僧服を、腰の荒縄で縛って着ながら、足許を質素なサンダルで固めた姿は、どうやっても見間違えようがない。

フランソワは学生だった。パリ大学の学生といえば、昔から聖職者と相場が決まっていた。俗人は脇役にすぎない。読み書きは長らく、聖職者の専売特許と考えられてきたのだ。なかんずく、パリ大学は神学の殿堂だった。フランソワは法学部の学生だったが、これも神学から枝分かれた教会法、もしくはカノン法のことだった。

別段、信仰が厚いわけではない。それがインテリの定石^{じょうしき}だったということである。片田舎にありがちな話で、フランソワも生まれ故郷のブルターニュでは、大袈裟に「神童」と騒がれた子供だった。さしたる自覚もないままに、両親に手を引かれて訪ねた先がドミニコ派の聖堂だった。世話好きな神父さまに相談すると、熱心に本部と掛け合ってくれて、修道会からパリ遊学の奨学金が出ることになった。それを手にする条件として、さしたる疑問も抱かずに、托鉢^{たくはつ}修道士の身分を受けたのである。まだ十三歳だった。

髪なんか、いつでも生やしてやるさ。むきになってフランソワは続けた。

「そんなことはさせられないわ」

「おまえのせいにするつもりはないんだ」

ペリンダは俯いて、少し黙った。栗色の髪が零れて、白い横顔が隠れていた。その刹那にフランソワが思うことは、喜悅の波に耐えかねて、いやいやをする少女のような動きで悶える、思いもよらない女の艶めかしさだった。

ペリンダは清楚な美しさを持つ娘だった。肩に栗毛を遊ばせながら、朱色の古着に大きな前掛けを結んだ姿は、ほっそりと頼りなくて、瘦せすぎな少女さえ連想させる。大人も子供もなく、女が原罪の象徴として、スカートの長い裾に隠さねばならないとされた太腿を、それでもフランソワは隅々まで熟知していた。

なるべきところは、女として十二分に実っていた。菱形に群生する恥毛の様子や、すっと縦に走った臍の線や、可愛らしい乳房の根から白鳥の首のような腕につながる、優美な腋の造形まで余すことなく、全てを知り尽くしていたのだが、そのことがフランソワには、信じがたく感じられると気があった。

幼さのせいだけではない。ペリンダには、ふっと女の色が失せる瞬間があった。修道女にも譬えることができないくらい、無彩に沈んで男の心を戸惑わせる。だから縫って、とっさに乱れた女の艶めかしさを思う。それでも逃げられない現実があった。そのことは、二人で何度も話し合ったじゃない。よく抑えの利いた声にハッとしながら、フランソワは我に返った。

ペリンダはあやすような笑みを浮かべていた。それが嘘であることは、笑わない目に明らかだった。牝鹿を思わせる愛らしくも利発な瞳は、くるくると表情を変える千変万化の宝石である。それが強張りながら、このときは安いガラス玉のように曇っていたのだ。

「俺は納得したわけじゃないぜ」

驚鼻を押し出ししながら、フランソワは話を蒸し返した。ずっと微笑が引けてしまうと、女の瞳に、なおも抑えられた怒気が動いた。瑞々しい唇が動いているのに、喉から押し出される声は、老婆のように低くなっている。そして冷たく突き放すようにいうのだ。やめられないくせに。

「そ、そんなことはない。高が托鉢修道士じゃないか。なにも、神父の聖職禄を貰っているわけじゃない。修道士なんか、いつやめたって構うもんか」

「ごまかさないで、フランソワ。あんた、大学を離れられるの」

「……………」

「修道士をやめるってことは、学生をやめるってことなのよ。あんた、学問をやめられるの。研究に命を賭けてるんじゃないかったの。え、どうなのよ、フランソワ。カルチェ・ラタンで聖域から出て、あんた、どうやって生きていくのよ」

「……………」

「ここで学者をめざすんですよ。それしか、できないんですよ」

ベリンダは、はっきりした女だった。男の心を魅了する天真爛漫な明るさを持ちながら、その美質と背中合わせに勝気な意志を譲ろうとしない。この馬鹿坊主が、結婚だなんて、できもしないことを口走らないの。金切り声で切り捨てると、女は神経質に手首を払い、足早に部屋を出て行くとした。どこへ行く。買物に決まってるわ。それとも断食でもしたいの。

「だったら、買物籠を忘れるなよ」

フランソワは敗北者の声でいった。金は足りてるか。ええ、昨日、奨学金が入ったから。

豊かな生活ではない。が、やっていけないわけでもなかった。ドミニコ会の奨学金は、所定の日

にパリ南端の僧院に赴けば、月々きちんと貰うことができた。フランソワは家庭教師を務めながら、すでに自分で幾ばくかの収入を得ていた。

将来を悲観すべき学生ではなかった。十四歳から始めて、普通は六年かかる教養部を、わずか三年で修了している。一年間の受験勉強を置いた後に、フランソワは十八歳の若さで、もう「マギステル」になったほどである。

マギステルとは「先生」くらいの意味だが、この場合は「教員免許」の認定試験に合格したということだった。今も教養諸学の教師として、一緒に私塾を開こうという誘いが後を絶たない。家庭教師で留めていたのは、さらに上級学部に進級していたからだった。

神学、法学、医学という専門学部のことである。カノン法を専攻するや、フランソワは順当に定められた五年の修学を経て、二十三歳で学士になった。上級諸学のマギステル、あるいは教養諸学の学位と区別しているところの、ドクトールにはなっていないが、こちらの「教授資格」のほうは大学の内規で、三十五歳以下の者には認められないことになっていた。

特例もないわけではないが、前世紀の大学者ジャン・ジェルソンさえ、二十九歳まで許されなかったのだ。フランソワも年齢待ちということ、それまで粘って研究業績を積み重ねれば、パリ大学で講座主になることも夢ではなかった。

「けど、おまえはどうなるんだ」

買物籠を差し出しながら、フランソワは聞いた。受け取った女の指が固まっていた。

今はいいい。いくらか慎みを欠いただけの、どこにでもある恋人同士ということで、今は気にするまでもない。が、パリ大学に残って教師になるにしても、あるいは聖職禄を得て、明日の司教を目

指すにしても、フランソワが僧侶である限り、いつまでたっても結婚はできないのである。

それは先のみえない日々だった。どんなに楽しくても、あるのは今という瞬間の積み重ねだけである。うまい形がついたところで、ベリンダは坊主の妾めかけということだった。

「あなたのところで家政婦に雇ってよ」

苦しく冗談にしかできない、そんな女の実顔こそが悲しかった。心配しないで、助平坊主。延長で夜の仕事もしてあげるから。

「おまえ……、そんな風に、ふざける奴があるか」

フランソワは小さな頭を抱き締めた。やめてよ。なんのつもりよ。ベリンダはもがいたが、許さずに束縛して、自分の身体に小鳩の心音を押しつける。甘ったれの泣虫坊主に、つきあってる暇なかないのよ。わたし、買物から帰ってきたら、あなたの論文を清書する予定なんだから。

こみあげる感情にフランソワの喉が詰まった。俺の女だ。俺の女なんだ。甘い体臭を吸い込みながら、こんな思いは初めてのことだった。

初めての女というわけではなかった。どころか、パリ大学の学生といえば、昔から口の達者な女たらしで通っていた。

それなりにフランソワも遊んだ。よく学び、よく遊べというように、いくら羽目を外しても、自由なカルチェ・ラタンに咎とがめる空気は皆無だった。同じく学問ができるのならば、遊び回った人間ほど、かえって尊敬される向きがあった。

世間並に筋を通せば、逆に笑われるだけである。ひとりの女に捕まるような、覇気のない間抜け野郎は、もう先がみえたも同じだよ。けんけん女房がわめき、ぎゃあぎゃあ赤子が泣くような

身の上で、なんの思索があるもんかい。養わねばならないなんて、ちまちまと授業料を計算してやる講義なんか、一ドゥニエの価値だってありゃしないさ。

結婚は感性の知性に対する勝利である。それはカルチェ・ラタンの不文律だった。女の男に対する勝利であるといいかえてもよい。下世話な生活の安らぎと、研ぎ澄まされた英知とは、決して両立することがないのだ。

なんの、女に同情する意味などあるものか。売春婦ならヒモになって、売り上げを搾り取ればいい。人妻なら小遣い次第で裏口から忍んでやる。金持ちの未亡人なら愛人の座に収まるのも得策か。摘み食いの家出娘なら、味見が済んだら回してやるのが、男の友情というものだ。カルチェ・ラタンとは、そんな勝手な男たちの巢窟でもあった。

だから、坊主が大威張りなのである。聖職者の肩書が責任逃れの便利な口実になってくれる。還俗してくれとまでは、女たちはいわなかった。女は責任を取ってもらう性であり、他人の人生に責任を取れる性ではない。ことが男の将来に関わるとなると、小さな女たちは腰が引けて、なにも強くはいえなくなってしまうのだ。

乗ってしまえば、こちらの勝ちということである。その仕組みをフランソワも、さんざ利用して生きてきた。心は少しも痛まなかった。なのに、ベリンダは違ったのである。

この女だけは日陰者にしたくない。悶絶する悩みを救う方便として、結婚という凡庸な結論しか思いつかなかったことは、フランソワには我ながら驚きだった。情けない。それでも軍門に降らざるをえなかったのは、ベリンダの嘘にも気づき始めていたからだった。

「なあ、おまえ、エロイーズを気取ることはいないんだぜ」